オープンミーティング
日時　2022 年 4 月 30 日の 15:00~16:30
テーマ　　『新高等学校学習指導要領始まる！p4c(的なもの)を始めよう！』
提題者　山方　元　　愛知県高等学校教員
司会　　金澤正治　　兵庫県小学校教員

参加者は全員で 11 名

発表内容は、山方さんによって、改訂されたものです。
1　今回の発表の背景

2022 年度から、社会科（公民科）に新科目「公共」がスタートした。おそらく、高校の教科科目のなかで最も哲学対話に親和性が高い科目となる。たとえば、現任校で使用している帝国書院の「公共」の教科書では、高等学校で高校生たちが「哲学対話」をしているようにみえる写真が掲載され。コミュニティボールの説明も付されている。まだ新年度が始まったばかりであるが、どのように取り組んでいるか、現場の最新状況などを報告する。
学習指導要領で、導入として 1 学期に学ぶことが特に推奨されているのは、学習指導要領の大項目 A「公共の扉」である。公民科・「公共」の「見方・考え方」「概念」「学び方」を学び、大項目 BC で活用するとされている。そして、「見方・考え方」「概念」として、倫理的に考えるために①規範倫理学（動機主義、帰結主義、徳倫理学）、②過去の哲学者や思想家の思想、③日本国憲法にある民主政治の基本原理、などの理論や概念を、また方法として具体的な事例や例示された場面での思考実験などを、ペアやグループでの対話（哲学対話を含む）を行い、多角的・多面的に考えて判断をすることが、示されている
哲学カフェや哲学対話が好きというか愛してきた者として、授業で、言わば正門から哲学対話に取り組めることには喜びや戸惑いもあります。街中の哲学カフェと同じように、参加者（生徒たち）が、哲学（対話を）することで、他者を知り自己の不可視や無知を知り、精神的な自由を獲得したり社会のあり方と自分の責任について、深く考えたり行動する貴重な実践が授業でできることは嬉しいが、競争的な環境で評価を互いに意識するなかで行う困難がある。しかし、困難があるなかで千載一遇の機会を活かしたい、と考えてポジティブに取り組んでいる現在進行形の様子を報告します。

2　学校の授業の実際の様子

街中の哲学カフェやｐ４ｃの多くは、個人商店みたいなもので、企画・運営は主催者（ファシリテーター）の自己裁量です。学校はそうはいきません。私が担当する、1 年生の「公共」は 3 人の教員で担当します。現任校では基本的に、同一目標、同一深度、同一定期テス

トが期待されています。教員の間にある科目観、教育観、生徒観の違いは当然あります。単独でするにせよ、「公共」の授業は「協働」「協力」でしなくてはなりません。制約、困難もありますが、また、可能性があります。

公共を学ぶのは 1 年生生徒たち。1 年生は 1 クラス 32〜34 人と少ないですが、さらにそれを前後半に分割しています。授業クラスは 16〜17 人の生徒としています。哲学対話をするには恵まれている環境です。

私が担当している 5 クラスは基本的に以下のように進めてきました。

1 時限目：オリエンテーション、質問ゲーム
2 時限目以降
　講義形式の授業　30 分
　対話　15〜20 分
対話後ふりかえり。P4C in schools KANSAI-JAPAN のものを使う（最初はシート 1，今はシート 3)、時間がないときは次回までの「宿題」。
※ 第 2 時限だけ全体で哲学対話（椅子を円に並べ、教員がファシリテート）
※第 3 時限以降　「金魚鉢」で、8 人ずつ前半⇔後半で対話

1 時限目のオリエンテーションでは、今までの古いタイプの教育（知識の注入、受け身の学び）への反省から「公共」が新設されたとして。「公共」の授業で目指す（教科担任の）理想や目標を説明した。例えば、「テーマについて、資料・素材等をよく観て、自身の経験・感性を手掛かりに、他の人と対話をして、批判的に考えて、見出した意味を、根拠を示して、言葉として説明できる。さらに社会の主体として考えられる」ことが身に付けられるような授業をしたいという話しをしました。

また授業の評価の観点を細かなことは話さなかったが、以下のように話した。

◆資料をよくみているか？（人の話をよく聴いているか）
◆観察した物事について言葉にしているか？
◆意見の根拠を示しているか？
◆他の人の意見をよく聴いて考えているか？
◆話し合い、調べたり、さまざまな解釈の可能性について考えているか？

授業の進め方として、大単元ごとに、「本質的な」問い Essential Question（以下 EQ）が提示され、各授業（小単元）ごとに本質的な問いを考えるステップとして Main Question（以下 MQ）があり、さらに一つの授業にはさらに下位の問い small Question を立てながら、

進めていく。そして問いを繰り返し続けて考える「探究」をする。

EQ と MQ に対しては授業後に文章を書き「評価」対象の一つとする。
評価規準は各教科担任に任されていますが、私の場合は以下のとおりと説明した。
　評価①・・・適切に解釈しているか？
　　「事実」や「出来事」「資料」をもとに根拠づけて、「読み取り」しているか？
　評価②・・・わかるように論理的に「説明」できているか。自分の言葉で説明しているか
　評価③・・・現代社会（グローバル社会、情報社会、ダイバーシティ（多様性）にふさわしい人間性、感性を発揮しているか。
　　多角的・・・「視点」を広げる。　性（ジェンダー）、民族、宗教
　　多面的・・・地理、政治、経済、文化、アートなど
　　批判的・・・フェイクニュース、ヘイトスピーチ

以上は、目標的な構想、設計図です。具体的に、どのようなことをしているかを簡潔に説明します。

1 時限目最初は、質問ゲーム。話すこと、聞くこと、問うことの練習ですが、4 月なので生徒同士がお互いを知り合う時間にもなればとしています。
2 回目以降、授業の構造は、前半は MQ に関しての講義（レクチャー）をして、後半は、哲学対話をします。

今まで哲学対話でとりあげた問いだしのパターンは以下のとおりです。
① 授業（公共）のテーマ MQ をそのまま使用する
② 授業テーマから教員が提案する
③ 授業テーマから生徒が出す。

哲学対話の問いは、以下のようなものがありました。
「AI は人を幸せにするか」「長生きすることはよいことか」
「成人年齢引き下げをどう考えるか」「情報化社会は進めていくべきか」
「＃映えを人々が求める理由は何だろう」
「工業高校に女子が少ないのはジェンダーバイアスか？」

生徒が考え、哲学対話ができる時間が短いので不安でした。授業後に書いてもらっているふりかえりシートなどから、以下のような生徒の声がありました。一部だけ略記します。

＜対話に肯定的なもの＞

・あまり人前で話す事を得意としないが、ボールを持っている人が話す方式でやったら自分の意見を発信することができた。
・ 自分の考えを整理できてよかった。
・ 自分は発言をすることはなかったけれど、自分のなかでいろいろ考えさせられた。
・ 積極的に話せない人が多い中で、ボールを取った人が話すというのはとてもよい。
・ 普段あまり考えることのない話題だったので楽しかった。

＜批判的意見＞
・ まだ話し合いがしっかりとできていないから、緊張する。
・ ボールを受け取った人でも話せない人がいたので、そういう人も話せるようになるといい。
・ 深く考えて色々なことを発言していきたい。
・ 最初なので、内容のある話は少なかったし、早く話せよという雰囲気があり、話しづらかった。
・ 深く考えるということの意味が分からない。
・ 個人の意見をしっかりとみんなに伝えることが出来たのはよかったけど、人の意見を笑ってはいけないということになると、笑うということがないと、うなずくといった反応もしてくれないし、議論が楽しくもないし、安心もできなかった。【この発言は紹介したいが、個人を特定できる内容でもあるので、紹介は控える】

＜対話で変化があったという声＞
・ 他の人の意見を聞いて、自分の考えが変わった。いろいろな考え方、感じ方があると思った。
・ 他の人の意見を聞いて、いろんな意見があり、他の人の自分とは違う意見も大切だと思った。
・自分は経験したことがないから理由が分からなかったが。今回の議論で理由が少しわかったような気がした。新たに、なぜ〇〇したいのか疑問に思った。

EQ や MQ は、「教科書」や教科書の「指導書」を前提に作られています。EQ はオープンクエスチョンですが、その日の授業で学んだことを、MQ といった問いに答えて書いてもらいます。そこで使用するキーワードが指定されています。書かれていることは似たり寄ったりになります。教員としては「評価」しやすい。「模範解答」のようなものを生徒が忖度しているからではないかと推測されます。私見では教員も模範解答へと生徒が寄せて考えるように誘導する授業をすることになっているなと思う。

対話後に、対話の「ふりかえりシート」を書いてもらっている。哲学対話の課題を知り改善

をするためが本来の目的であったが、EQ シートに書かれる内容や表現が違う。たとえば、MQ が「＃映えをなぜ人びとは求めるのか？」の授業だと、教科書や授業内容を踏まえた模範解答案としては次のようなものを私は想定している。

「私達は誰もがマズローのいう「承認欲求」がある。科学技術が発達し、情報化社会が進み SNS が広がると、承認欲求はますます強くなる傾向にある。インスタ映えは、日常生活で欲求不満がある人にとっては、フロイトがいう「代償」が気軽にできる適応行為ともいえる。しかし、承認欲求が強すぎる人は、「＃映え」する写真を撮るために社会に迷惑をかけたり、「承認」を人に過度に求めて人間関係を悪化させるなど問題となる場合もある。」

それに対して対話語の「ふりかえりシート」は、生徒独自の視点で言葉で書いてくれる。たとえば以下のように。

「＃映えをなぜ人々は求めるのか？」

そもそも「映え」は日常にあり、私たちの目に見えている物だと思います。桜やたんぽぽ、イチョウの木の紅葉など季節を感じる物は「映え」だと思っています。そしてそれを大切な人や好きな人と共有したいと思い、話しをしたりします。現代のインターネットは、誰にでも簡単に使用することができます。そしてインターネットの感覚共有は、共有したい人の範囲が拡大したものです。より多くの人と共有をしたいと思い、「きれい、かわいい」などが「映え」としてなり、しだいに、自分の感覚より、「みんなが見ている」という相手のきたいにこたえたい、こたえなきゃという思いが強くなり、本来の目的が「相手を思う映えをとる」というものに変換してしまったからなのではないかと思います。

このふりかえりシートを読んで正直ショックを受け、他の教員ともシェアして話したのだけれど、模範解答へ寄せて書かせようとして、それに応えた生徒を高く評価するということでは、生徒がもともと持っている考える力、感性、表現する個性、これらの芽を摘んでしまっているのではないか。教員以上のことを考えて表現する生徒をダメにしている恐れがある、等々。生徒が本来持っている力をそのまま大切に伸ばさなくてはいけないのではないだろうかと。

3　私自身の自己評価

〈生徒〉

・ 年度初めは、「公共」では「対話」の時間があるものだ、と対話へ向かう姿勢・対話の価値観形成の時期として生かせる。

・ 対話をしたい生徒、考えたい生徒がいる、という手応えがあった。

・ 生徒が対話の「課題」を正直にフィードバックしてくれる。
・ 社会科教員の想定外、想定を超えて考え、ふりかえりをしてくれる。
〈教員集団〉
・ 哲学対話を他の社会科教員が見学された。哲学対話そのものではないにせよ、対話の手法に関心を持たれていた。今後ともお互いの授業を見学しあい学びあう。
・ 授業計画など敷かれたレール、決まった方針にただ従ってやりっぱなしではなく、教員同士で反省し、課題を出し合い、考えあい、授業の相互見学や授業改善の建設的なオープンな意見を言い合う「同僚性」が新科目「公共」のおかげで高まっている。
・ 生徒のふりかえりシートは教員にとって一番インパクトがある。
・ 私自身、今まで 50 分フルでゆっくりでないと哲学対話の実践は難しいと思い気持ちが退却していたが、短いなりに哲学対話をしようと元気が出てきている。

課題
・今まで 勘と経験と度胸でやってきた、今もやっていることを反省
・ 生徒の人間関係のケアがとても大切。対話ができる大前提である。どう作り維持するか
・ サイレント・ダイアローグの導入でさらに思考が深まるようにしたい（振り返りシートの活用を検討している）
・ 金魚鉢をしてフリーライダーがでないか（評価シートの様式を変更した）
・ 対話の楽しさを経験することを先行している。考え方、場をケアすることなどの、スキルや姿勢（構え）は、これから「思考の七つ道具」などの提示などをしていく必要がある
・ 生徒からの問いの対話への遺構・・・問いだしのワークを検討
・ 生徒が進行役になる・・・今後の状況を見て時期をみて検討
・ 金魚鉢から全員対話へ・・・時期をみて
・ テンポが速すぎて、スローな思考・発酵時間がない
・ 「生徒」個人の固有名詞の呼びかけ・・・匿名性ではなく個体識別
・ 生徒に「どう書いたらＡの評価がもらえますか？」と問われた・・・評価をどうする
・ 「歴史総合」と哲学対話の融合・・・「公共」だけで哲学対話が終わらないように、2 年生 3 年生の地歴科の授業内でも哲学対話ができるようにカリキュラムマネジメント
・ 哲学対話を形式化しない、ルーティン化しない。

4　Ｐ４Ｃと公共の違い
　公共では「義務論」「帰結主義」など、プチアカデミックな原理を学ぶ。浅い単純な「専門的な知識・概念」を使って対話して、深く複雑なものを含めた概念へ更新していく。まちなかの哲学カフェあるいは P4C では、専門的な知識が不要ということになっていて、素人として素朴理論から考え直していく良さがある。これは議論のあるところかもしれない。「公共」は、アカデミックな専門的な知識、といっても、「動機主義」VS「帰結主義」のど

ちらを選択するか、といったマイケル・サンデルの白熱教室のようなものに図式・形式化され、公式を覚えて応用するだけへと形骸化することにならないかとも一方では思う。
※この、哲学と、学問と、日常生活と、政治と、教育の切断が、私としては哲学カフェの実践でも課題であり、どのようにしていくのか楽しみながら考えたい。

Q＆A（Q は質問者、A は回答者、C はコメント、意見です）【注は報告書作成者のコメントです】
Q：「金魚鉢のフリーライダー」とは、何ですか。
A：対話グループに入っていない生徒に、 対話を見て欲しいけれど、例えば寝てる生徒や、おしゃべりをする生徒がいたりして、その生徒たちにとっては外側にいる時間が休憩のようなものになってしまう。その生徒たちのことをフリーライダーと呼んでいる。今後は、対話グループに入っていない生徒たちに対話を観察し評価してもらう活動もしようかと考えている。
Q：対話の進行がうまくいく・いかないには、クラスの雰囲気というものがあるのか。
A：1 年生の学期初めなので、生徒に、哲学対話は安全安心な場でなければできないと説明している。対話を通じてお互いの信頼関係を深めたい。安全安心はスタートであってゴールである。このような説明をして、対話ができることがいいクラス、いい人間関係のことだと伝える。ただ、傾向として、自分の価値観とは違う人とは話をしない、交わらないという傾向がだんだん強くなっているのではないかとは感じている。そういう意味では、哲学対話がしづらいと感じてきたこともある。ここ数年、入学してくる子たちは対話がしやすい。高校の授業で対話を頑張っているからという感じではなく、おそらく、中学校などで対話の授業をしていて、対話に対する構えができているのではないか。今年の生徒に関しても、とてもやり易い。この点に関しては、非常に恵まれている感じがしている。ということで、教員の関わり方次第で成果が出ると感じている。
Q：評価の仕方で、どういう工夫をされているか。
A：現在は、学習指導要領上、学校は、どういうことを評価するかあらかじめ生徒に提示しなければならない。評価のルーブリックを作成している。どういう資質・能力を育成するかを示して、それが実現できているイメージをもって授業の目標を書く。生徒はその評価を良いことだとして、そのような方向へと努力する。ある意味、生徒はそこへと誘導されている。リバータリアン・パターナリズム（ナッジ）という行動経済学のもの。しかし、生徒はそのような評価が無くなれば、それを脱ぎ捨ててしまうのではないか。評価をご褒美として与えて、そこへと生徒を誘導するのは望ましくない。
　ルーブリック評価の場合、内容を評価にするものがある。つまり、こういう内容を書いていたら A をつける。内容なので、思想の中身とか考えそのものに誘導する。しかし、他方活動を評価にするものがある。

私の場合は、活動を評価にしている。主張があって、論拠を示す書き方をしていれば、そこを評価すると生徒に伝える[1]。生徒に対して、先生の顔色をうかがうな、自分がどういう考え方を持っているか、自分の考えを主張する、それに対する理由も、出来たら、論理的に説明できるようにしなさいと伝える。とはいうものの、振り返りシートなどを見ると、生徒のふりかえりの方が自由で、生徒はよく考えていていることを見せつけられ、このような仕方で書きなさいという方がおかしいのではないかと思うことがある[2]。かえって、生徒の才能をつぶしているのではないかと思うこともある。教員の評価に合わせて生徒が書いてき

---

[1] これは「内容評価」ではなく、「形式評価」（あるいは「プロセス評価」）と言っていいのではないか。内容評価の場合は、授業で学んだ内容に基づいて評価するのに対し、形式評価は授業の内容ではなく、理由・根拠を示した、論理的な表現であるか、具体的な例を用いているか、凡例を用いているか、主張の論理的展開を述べているかということで評価するので、内容的には個性が出てくる。

[2] この自由で、よくできているという判断の内容は何か。振り返りシートの内容が豊かで個性に富んでいる、つまり自分の言葉で書いているということなのか。そういう点で、「内容評価」だけでなく、「形式評価」を凌駕しているということなのか。教師の示した模範解答例には授業の内容が適切にまとめられているが、生徒のふりかえりシートの方が内容的に豊かということなのか。学習指導要領で言われる評価は資質・能力の３つの要素に基づいている。つまり、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」（これは、以前は、「関心・意欲・態度」）であるが、これらの観点から見て取り上げられた生徒のふりかえりシートを評価することができるのではないか。例えば、「知識・技能」は教科内容のことであり、これはインターネットにおける承認欲求を、生徒は理解した上で、自分の具体的な経験と結びつけて表現しているので、評価は高い。「思考力、判断力、表現力等」は、具体的な例からインターネットへと議論を展開し、インターネットの承認欲求の在り方を「きれい、かわいい」で例示し、このことが人間心理において拡大するとどうなるかという推論を展開している、それも自分の言葉で表現している点で、評価は高い。「主体性」の方は、表現全体として、課題へと向かう態度・関心が非常に高いので、評価も高い。子どもに評価を伝える場合、このような文章を例示して、これがなぜ評価が高いのかを示すことによって、生徒に刺激を与えることができると考えられる。また、なぜこれが高い評価を受けるのか、生徒同士で話し合うというメタレベルの議論があってもいい。

これは、例えば、模範解答を生徒に示した場合、生徒はかなりなプレッシャーを受け、それに合わせて書くということは、生徒を縛ることになるかもしれない。しかし、形式評価は内容を問わないにもかかわらず、評価項目を実現していれば、非常に優れた文章を書く可能性をはらんでいると考える。例えば、自分の提言に、その理由・根拠を述べるということは、生徒をダメにするはずがないと考える。自分の経験と結びつけ、具体例や反例を出して、さらに推論するということは、生徒自身を生かすことだと考える。

たら、生徒をダメにするのではないかというようなことを教員同士で話すことがある。
Q：評価を先に示すと、生徒をそこに誘導するということになるということは議論になり、そこをどうするか、まさに話し合っているところです。
C：評価の基準を生徒にも保護者にも公開する、ということですが、やはり難しいところです。
C：対話では、指導要領の枠を超えるところがあるのではないか。
Q：公共でやるのと、探究でやるのとは違うのか。
A：指導要領も色々な立場の人たちが書いているわけだから、教師の方も自分たちで、カリキュラムマネジメント的にいろいろ解釈していくことができるのではないか。